

三学期の教育のこころみ

—教師自身の反省から—

柴 田 い つ

(一) はじめに

いろいろな経験や活動を経て、幼稚園の修了を迎え、そしてそれぞれの発達をふまえて成長の過程を歩んできた幼児たち、いまこれらの幼児を前にするとき、教師としてこれよかったですのかという反省の気持ちでいっぱいです。つまり、幼稚園の生活の過程のなかにおけるさまざまの活動は、幼児らに役立ち、価値あるものであったか、また、幼児たちの豊かな可能性の芽を、限

りないいのちの躍動を、どんなふうにも教師として育てていったのかということが反省させられるのです。

一学期の幼児、そして二学期三学期と幼児たちの発達にそって経験する内容も変化し広がってまいりました。そこには、たえずくり返していくものもありますが、新しい刺激による発見やよろこびもあります。あるときは、活動の発展がゆきづまってしまつて、幼児とともに苦しんだこともありました。何はともあれ、いくつかの曲折をみながらここまで進んできたわけです。ここにこのようなテーマを受けて、私は新しいこころみを述べるといふよりも、この三学期をふりかえつての卒直な自分の考えや問題点をあげ、幼児の成長をふりかえつてみたいと思ふのです。というのは、新しいものよりも、平凡なことの中に、実は、本質的な問題があると思ふからです。

(二) 三学期としての反省

三学期といえは、しめくりの時期、総まとめの学期といわれますが、たしかに、一年生らしい学習態度がある程度そなわつてきているという面からみた発達段階のひとつのくぎりといえましよう。

しかしこれらのことについて、まず、ひとりひとりの幼児の生活や態度をながめてみると、さまざままで、物事にとりくむ意欲も、

興味の度合いもちがうようです。それは、それぞれの幼児のもっている特性や能力によってその差違があるのでしょうが、環境からくる問題や条件によっても、大いに影響をもたらすのではないかと考えられます。といいますのは、このごろは、いろいろな材料が出まわり、あまり苦勞することなく物事が成就できたりすることが多く、地道にこつこつとする努力は一般にうすくなってきているのではないかと思うのです。このことは、幼児のあそびでも同じように、目新しい遊具、経費のかかる材料が多くなり、幼児の自然的な要求になつた素材なあそびがうすれていくような傾向、そして、このようなことのために、友だち同士の協力や、なにかをやるうとする意欲も阻害されやすいのではないかと思われます。だからやがて義務教育の学校の体系の枠に入る幼児たちにとって、最後のこの学期に、幼児期にしておかねばならない活動を十分させてやり、そして、それを卒業させるために、一休教師として、幼児たちに何を要求し、何を期待したのかということについて、つくづく反省させられるのです。

つぎに、これらの問題を教育の目標と活動との関係でみていくと、私の園では、

「グループで協力して、あそびやしごとをする」

「創造性を豊かにし、自主的にあそぶ」

というように、三学期の目標をたてていますが、このようななら

いは、どのようにして達成されたのでしょうか。何となく不安が残るのです。

でも意欲はあつても、断片的なあそびになりがちだった二学期にくらべて、おちつきをみせて、ひとつのことに長時間集中できるようにはなりました。トランプやかるたあそび、三、四人で相談したおはなしづくり、大きなビルづくり、自分たちで始めた合奏あそび、ままごとコーナーでの指人形あそびなど、幼児の興味や活動のいとぐちをうまくとめてやつたり、教師のさそいかけや援助で、それらは、たのしい発展もみられました。もちろんその過程における教師と幼児、幼児と幼児同士が、どのようにかかわつて、ひとつのものを創りあげていったかは、大切なことですし、そのことの教育的価値は非常に高いものであることは、いうまでもありません。

しかし私のこれまでの三学期の実践のなかでは、あくまで幼児の興味や意欲を根底として指導をすすめてきたとはいいいながら、やはり教師中心の計画が強かつたということを反省しています。とくに三学期は、期間も短く、行事的な面も多いので、幼児らの活動をせばめてしまう結果にもなりがちでした。劇あそびに必要なものを話し合つても参加しない幼児もできますし、そのため必ずしもみんなが、グループの目的に向かって行動するということはむづかしく、ある程度の限界もみられました。が、「もつと〇

○にした方がいい」とか、「もっとたくさんいるよ」と提案してくれたり、独創をいかしてくれる幼児もいます。そういったチャンスをもりたてて、幼児の活動を充実させていくための教師の努力についてのいろいろの問題が多く残っています。つまり、このようなことでは、私のねがう豊かな人間性や、友だち同士の協力、そしてあそびやしごとに対する意欲も、また幼児期らしい素朴なあそびについて、表面上は一応すっきりとできていても、なにかその根本に、しっくりいかない面が感じられるのです。

このような考えのもとに、私は、この三学期の活動のなかから、幼児自身でつくりあげ、そしてたのしく展開していった実践を拾いあげて反省してみたいと思います。

(三) 三学期の実践から

(1) さいころあそび

二、三日前、全員であそんだ四角のダンボールのさいころで、朝からAとSはころがしっこをしていた。「あ、ぼく3」「あ、ぼくは4でた」とあそんでいるところへH登園。「ぼくもさーして」と仲間に入る。早速Hがやると、ころころと回って2がでる。「Hくんうまいわ」こままわしのときもトップだったこの幼児は、コントロールがよいのか、右手の力の入れ方よく、投げるようにしてころがす。交替しながら、しばらく三人であそんでいたが、Aが

「ジャンケンごっこしよに」と提案、ジャンケンで先の組をきめ、二人でジャンケンをしながら勝った方がさいころをふり、でた数だけ進んでいくといったあそびである。

部屋は広くしてあるので、ゆっくりスペースをとってあそぶ。前の黒板につきあたったらもどつてくるといったルールで、教師は部屋の隅のトランプあそびにいたが、「Aちゃん、ジャンケンつよいのね」と声をかけてやる。そのうち人数がふえ、ジャンケンの声が大きくなって応援組もできてきた。やや室内がせまく待つ時間も多くなってきたので、もう一個ダンボールの箱があるので、「Y君たち、もう一個さいころつくる？」と誘いかけてやった。「うん、つくる！ 箱あるん？」と元気よく寄ってくる。「ほら、これね、ここに紙もちょうどあるから、つくるといいわ」と与えてやる。すぐさま、Y・O・Hは六つの面に紙を貼りだした。あわてん坊だったHも、両手を使って慎重に貼る姿がみられた。そのうち貼ったさいころを、窓ぎわの陽あたりに乾かしながら、なにか相談がはじまった。

「オバキュウとき、ゴジラとモスラー」とH、「そんなん描けへんわ」とO、「Yくん、スーパーマンじゃうずやで描いてんか」とO、どうやらさいころに絵を描くらしい。教師は幼児たちの発想をうれしくそのまま見守ることにした。そのうち、マジックをもってきて、Yは、早速大胆に、箱の上に描きだした。Hも待ち

きれず側面にこだまを描きかける。そのときM子が、「あ、あの子たちさいころつくらへんに」と側へとんでいって、「あーあーさいころは丸を描くへんやに」という。「ええのやわ、これさいころやぞ」とYがいいかえしている。「へーおかしなさいころ」といいながら、男児の描くのをみていた。(この幼児は、二期期は、よく友だちの作品にいたずらをしたが、きょうはじーとみていた)ジャンケンをしていたグループも、トランプのグループも集まってきて、ふしぎなさいころのできていくのをみていた。

「せんせい、Yくんのスーパーマンじゃうずやに」とC子が教師によびかける。Hは、一生懸命かいていたが小さいジェット機になり、E子に、「このジェット機ちいちゃいわ」といわれ、いさかしょげているように、教師はすぐ「まあーどんなさいころができたの?」といいながら寄っていく。「へーえ、これはカワムラ(おもちゃやのなまえ)にも売ってないわね、ふーん、おもしろいわね」といって感心をする。Hもうれしそうに笑ってくれた(このHはあまり絵は得意でなかった)。「えーとね、オバキユウが(1)、ゴジラが(2)、ジェット機が(3)、宇宙エースが(4)、こだまが(5)、スーパーマンが(6)やに、スーパーマンは一番つよいでおけなん」とYが説明してくれる。みんなもYの説明を聞き、理解したようであった。

さらに、Yは、「まちがうとあかんで、ここへかず描いてある

んやに」と隅の数字を指さしてくれた。こうしてできたさいころをもって、園庭にでてゲームをしようということになり、「いこう・いこう」と幼児らは元気にとびだしていく。教師も思わず心はずんで幼児らといっしょに外にでる。そして、ゲームのやり方をみんなで相談し、いろいろな意見をいいあって、室内であそんだジャンケンの変形を考えだし、ラインをひいてあそんだ。「わー、スーパーマンや」ととびあがって六つとんで前進したり、「チッ、オバキユウや」一つしかとべず残念そうにしている幼児たち、室内では比較的消極的な幼児もみな集中して力一杯あそんでいる姿に、ほんとうに幼児らしさを感じた。

その後うけ合いっこや、サッカーあそびに発展し、あそびは幾日もつづき、またとだえたりしながら、室内でも椅子を利用したあそびなどに展開していった。このようにして、ひとつの経験が土台となって幼児たちは、さらに、新しいものをつくっていった。

(2) 一枚のダンボールから

きしやをつくったとき、切りはなした大きなダンボールの横ふたが残っていたので、それもちだし、AとMはすべりっこをやりだした。「ヨイドン！」で同時にダンボールの上ののっかり、そのはずみでスーとすべる。スリル感があつておもしろく、他の幼児たちの興味をひいた。KとSも刺激を受けてやりだす。でも他の幼児たちの活動を考えて教師は、「ぼくたち、ここみん

なの通りみちだから気をつけてね」という。Aは、「うん、みんなここを通るなよ」と大きな声でいい、「よし、ここスタート線にしよ」とMと相談がまとまった。自然スタート線のうしろを他の幼児たちは通ることになった。あと三人友だちがふえ、交替しあいながらあそんでいた。

つぎの日、昨日の二人は朝登園と同時に、ダンボールのはしに穴をあけ、なわとび(柄のとれたもの)のひもを通して、「きつう、くくれよ」と二人は一生懸命である。KとSもよって見入っている。しつかりとなんべんもくくりつけてやっとできあがり、「さあ、ひっぱったるののれ」とM。大きなからだのAは、「よいしや」とのり、小さいMが引つ張る。「ワ、ラクチン、ラクチン」とAは歓声をあげる。包装紙で人形の服を幼児らといっしょに作っていた教師は、「あ、Aくん、よそ見しちゃあぶないわよ」とやっぱり気にかかり、その子たちの側にきて、「ぼくたちね、おもしろそうだけど、外でやらない？ 広いからもつとスビードだせるわよ」と促してみた。でも、「そとはさ、砂があるのですべらへんもの」とAはいう。

なるほどと思って、「じゃあそこで絵をかいているひとにあたるとかわいそうだから、廊下でしてね」とたのんでみる。「うん」といって廊下にでいったが、そのとき男児ばかり六人にふえ、廊下でかたまっていた。教師は、あそびを中断してしまったのか

と案じながら、みていると、そのうち、一人が入口に立ち、もう一方の人口に他の幼児が並び、順にのせてもらっている。「ここがあいたらのれ」といいながら「エレベーターですよ」といっている。きしゃごっこに使った切符をもってきて入口で渡し、のせてもらっているように、どうもさっきは役割の相談をしていたのだ。エレベーター係、出発係、運転係、お客さんといった役割で、お客さんをそりに二人のせては運んでいた。

次の日は「小さくみき」の長い柄の先に、丸板をはめ、ちょうど、ハンドルのようにして、前端にさしこみ、そこを持ってやりかけていたが、すぐはずれてくるのでやめてしまい、それを両方にもってスキーといってすべっていた。これは、一枚のダンボールからの発展であるが、乱暴だったAも、自分の考えたあそびが受け入れられ、興味が増大してきて、友だちとあそべたことに満足をもったのか、それをきっかけに、他のあそびやしごとにも、協力的な態度がうかがえるようになってきた。やっと三学期の幼児らしさがみえ、友だちからも人氣が集まってきた。

(3) ケンケンあそび

女児五人がケンケンあそびをしている。ここ二、三日前よりはじまったあそびで、きょうは男児もまじっている。「I君、ここは両方の足でとぶんやに、バーとまたぐんやに」とY子「あー、すじふーんだ」とM子にいわれ、何度か教えられて、しんけんに理

解しようとしている。「あ、またぬかした、ここで「てつ」を拾うんやに」とM子。このようにしてケンケンあそびが広まり、控え目なH子も、理くつやさんも素材なあそびに興味をもち、マジックで色つけをした石などをつくったりして、たのしむ姿もみられた。「このごろYちゃんいばらんようになったな」ともいうようになり、教師も、いっしょにあそんでみて、まだ、あそびを知らない幼児たちへの関心をもたしてやったりして、幼児同士、お互いあそびを認めあったり、助けあったりしながら、友だちの動作も、よく観察し、理解しようとする態度も、はっきりうかがえた。また、「3つとんでき、また4つとんで……」など数的なあそびにもなり、また基本の形から、変形していこうという意欲も生まれてきた。

(4) 幼児の会話から

ままごとコーナーであそんでいたグループ五人が、赤ちゃんをベットにねかせ、そのまわりをぐるーとかこんでいる。側へ寄ってみると、口達者のY子が、「そしたらね、まほうつかいのおばあさんがね……」と話をしている。まわりの幼児たちも、しんけんに入り入っている。教師の顔を見て、Y子は、「赤ちゃんのハシカまだなおらないの、だから赤ちゃんたいくつだから、ねむり姫のおはなし聞かせてあげてんの」という。そしてさらに、「あのね、そしてね、Mちゃんとこ、お引越するんで、お別れのパーティー

も考えてんの」という。教師は、「まあ、どうしてお引越なの？」ときくと、「あのね、夕べの台風でね、おうちがこわれたんですつて」とこのY子の想定らしいが、MもNも、「すーごい台風でいっぺんにベッシャンコになったんやに」という。この幼児たちの話をききながら、教師は、このまま、この会話を、劇あそびにとり入れたと考えた。

その日の食後、教師はY子にもう一度みんなにも聞かせてあげてどもちかけてみた。このごろクラスでは、知っているおはなしや、自分でつくったおはなし、またつぎたしおはなしなどに興味をもちはじめたので、ストープをかこんで、Y子も得意になつてはなしてくれ、みんなも熱心に聞き入ってくれた。また、このねむり姫のはなしは、一学期(六月)よりずーとレコードで親しんでいるもので、これまで、いろいろに展開してたのしんでいるものである。つまり、まほうつかいのでてくる無気味な場面や、まほうつかいのおばあさんのいうセリフを聞き取りにくいので、何度かその箇所だけ聞いてみたり、ごちそうづくりになったり、王子さまが馬にのって勇ましく、でてくる場面など、即興的な身体表現も経験してきているためか、Y子のはなしも、さらに発展して、他の幼児たちもつぎたしたりしながら、おもしろい内容につくりあげていった。

この経験から、私は、短期間のうちにくり返し興味づけ、関心

を呼びおこすより、それは、長い期間のうちに、自然にくり返されて、幼児のなかに、とけこんでいき、大切な価値として育っていく総合的なものを幼児から教えられたように思った。

(四) まとめとして

以上これらは、身近な幼児らのあそびのひとこまでありますが、私はこれらのなかから幼児たちにとって大切な成長としてみられることがらについてあげてみたいと思います。それは、つまり、

- ・ あそびのルールを理解しようとする態度
- ・ 友だち同士刺激あつて育っていく成功感
- ・ あそびの方法をみんなで考え、そして認識しあい、盛り上げていこうとする意欲

・ 友だちの意見もきいて、協調し、深めていこうとする態度
・ 興味によって育っていく自信と役割についての責任感
などの点が、二学期に比して、はつきりとみられたと思うのです。そして、幼児からの発想のなかで生まれたあそびのなかにこそ、自然にむりなく、幼児の創造性、自主性も育っていくものだと痛感したのです。でも、幼児らの発想によるあそびも、幼児に全面的にまかしてよいときと、その場に応じての教師の助言や態度によってあそびの内容の質的な向上もみられるのでないかと思われまます。このことは、成長した三学期においても大切なことで、一

応幼児たちがまとまってあそんでいると、教師は安心感をもちますが、やはりこれらの実践をふりかえって、教師の役割の重要さを感じさせられました。とくに、知的面や、認識面の発達から、幼児たちの要求もかわってくる三学期こそ、総合的にみて幼児のあそびを真剣に考えていかなければならないということを強く感じたのです。理屈では分かっている、つまりこういう段階をふんで、こんな指導をしたら、たのしい発展がみられると、教師は計画をたてても、目の前の幼児たちには、プラン通りにいかない場合も多くあります。予期しないあそびの出現や、幼児の着想に、教師自身とまどったり、感心したり、幼児教育のむずかしさを、いまさらのごとく感じます。

幼稚園における大きいねらい——ひとりひとりの成長と、その幼児のもつ可能性の芽ばえを育ててやるための努力を、私はもう一度反省してみなければと思ったのです。この意味からも、特定の幼児やグループの成長だけでなく、クラスのどの幼児も、自分の力を十分発揮し、自信をもってとりくんでいけるような、そういった活動の場を教師は配慮し、そしてそのなかでのひとりひとりの幼児の成長を伸ばし励ましてやらなければと思います。

最後に、明日に伸びる幼児のために、さらに前進していきたいと考えております。